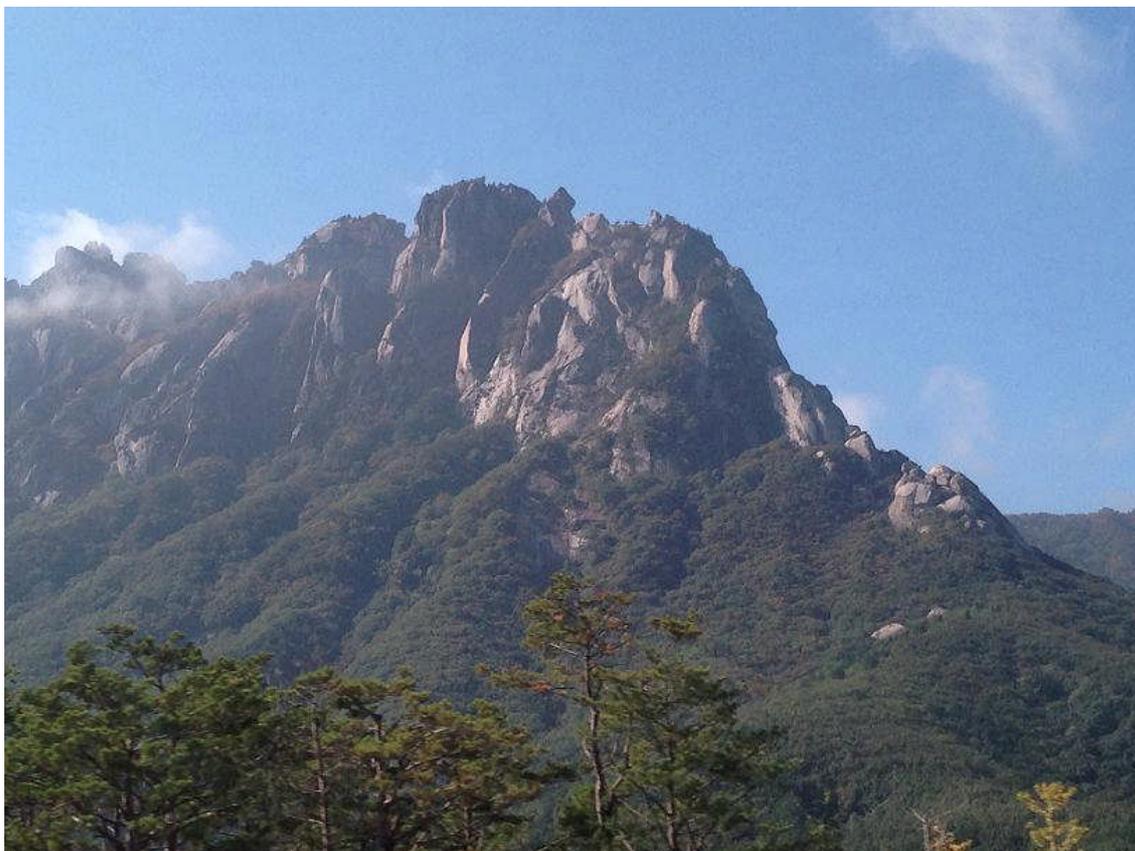


平成25年度PTA日韓交流事業報告書



期日 平成25年10月8日(火)～11日(金)

鳥取県PTA協議会 荒瀧 美由紀

加藤 茂樹

【事業概要】

1 目的

環日本海諸国（韓国）とのPTA関係者との交流の促進を図ることにより、相互理解と友好を深め、子どもたちの健全育成に向けた活動をより一層発展させる。

2 日程 平成25年10月8日（火）～11日（金）（3泊4日）

期 日	内 容
10月8日（火）	米子空港集合 13:30 米子空港発 15:00 仁川空港着 16:40 迎晚餐会 (春川泊)
10月9日（水）	・公峴津初等学校訪問（高城） ・烏竹軒見学 ・PTA関係者との協議（江陵） ・歓迎晚餐会（PTA関係者） (江陵泊)
10月10日（木）	・鏡浦幼稚園等訪問 ・江陵女子高等学校訪問 (仁川泊)
10月11日（金）	仁川空港発 09:30 米子空港着 11:00

3 訪問者

前田 昇（団長）・加藤一巳・砂口浩二・荒瀧美由紀・加藤茂樹・
井上勝・慎 慧蘭・澤田和明・松本洋介

4 訪問先

(1) 教育施設（公峴津初等学校、鏡浦幼稚園等、江陵女子高等学校）

(2) その他（烏竹軒）



5 交流2日目（10月9日）の日程

（1）公峴津初等学校訪問

<概要>

6クラス、39名の小規模な小学校である。2011年から韓国公教育初の「シュタイナー教育」を取れ入れている。2012年から2016年まで、江原道教育庁の指定を受け、学校独自の教育課程を運営しており、新しい教育、新しい学校作りの優秀事例として、マスコミにも紹介されている小学校である。

特徴的な取り組みには、「動き教育」と「ハンウルタリ（同じ垣）集まり」がある。「動き教育」というのは、午前の休み時間（30分間）に行う運動遊びのことである。具体的には、一輪車・ジャグリング・なわとび・皿回しなどをする。体のバランスと感覚を養い、頭脳の発達を促すことを目的としている。「ハンウルタリ（同じ垣）集まり」というのは、1つのテーマを決め全校生徒と教師がいっしょにディスカッションする時間である。

ここでは、児童の発達に合わせた教室環境にも配慮している。1年生の教室には机といすの代わりに床にカーペットが敷かれ、自由に動く低い机と座布団にすわって授業を受ける。黒板も窓のように開け閉めできるようになっていたり、カーテンや壁の色にも工夫がなされている。学校の裏山は、子どもたちの遊び場になっていて、子どもたちもいっしょに作ったというツリーハウスがあった。



動きの授業



1年生の教室



ツリーハウス

<感想>

体育館で「動き教育」を見学した。子どもたちは一輪車をしながら皿回しをしたり、バランスボードにのって皿回しをしていたりと、2つの運動を同時にやっていたのが印象的だった。運動も組み合わせてやると難易度が上がり、脳の発達にさらによいのではないかと思った。ゲームやインターネットで遊ぶ今の子どもたちに必要なのは、もっと身体を使って遊ぶことだと思う。学校の周辺の環境もとてもよく、裏山は格好の遊び場で、太陽の光や風を感じたりできる良い場所だった。ツリーハウスも魅力的なところだった。見学の際、風がとても心地よく、ここで遊ぶ子供たちは知らない間に身体を使うことが楽しく感じられ、さらに五感を刺激され、発達段階においてとても良い影響だろうとおもった。ちなみに、この教育プログラムを受けたいために、転校してきた子どもがいるとお聞きした。(訪問当日は、なんと韓国の祝日だったにもかかわらず、学校に出てきて様子を見せてくれたと、あとでお聞きして恐縮だった。)



(2) 学校運営委員会との意見交換

・鳥取県では「早寝・早起き・朝ごはん」をスローガンに、子どもたちの規則正しい生活習慣の定着をめざして、ノーテレビデーなどさまざまな取組みをしている。韓国では朝には必ず家族が集まって朝ごはんを食べるとのことであった。この食卓での会話はとても大切であると述べておられた。韓国の、家庭での教育は、人格や人間性を育てるのに重要で、“子どもは親の鏡である”から親に対しての教育にも力を注いでいるとのことだった。

・韓国には学校に関わる2つの団体がある。ひとつは、学校・保護者・地域の代表で組織され、学校運営に関わっている学校運営委員会。もうひとつは保護者で構成される父兄連合会である。日韓とも、会合や企画された講演会などの活動に対しての参加者がおもわしくない現状がある。その対策についての意見が交わされた。江原道では、声をかける、会合など参加しやすい時間帯を設定するなどの意見のほかに、親子で楽しめるアドベンチャー的な企画をして講演会への参加アップをはかったり、プレゼントを校長自ら渡し、感動してもらって参加してよかったと思ってもらうようにしたりしているとのことだった



参加者

た。鳥取県側でも、高校生が親子で大学訪問をする際、一流ホテルのランチを組み入れる工夫をして、参加率アップをはかっているなど、活発な意見交換となった。さらに踏み込んで意見交換できたらと思ったが、時間が限られていたので残念だった。

6 交流2日目（10月10日）の日程

（1）鏡浦幼稚園訪問

<概要>

2003年に開園されたばかりの新しい幼稚園で、クラスは6クラス（支援クラス含む）児童数125名、教職員29名の幼稚園である。子どもらしさを軸に、五感で体験する遊び・経験中心の教育を行っている。具体的には、毎週1回、裏山に山のぼりをしたり、虫めがねを持って行って詳しく自然を観察したりしている。



特筆すべきは、森の体験として、デジタルカメラを一人ずつが持って、木や花、空や風景といったものを撮影するプログラムである。撮ってきた写真で、展示会も開いている。障害のある子どもたちといっしょに何かをしたり、様々な文化の料理や歌、服装などを体験したりといった多様性を尊重する活動もある。

園内は、色彩がとても豊かで、使っている塗料もアレルギーに配慮したものだそうである。玄関すぐには絵本コーナーが設けられていた。座って読めるように工夫もされていた。この幼稚園の向かいには、小学校があり、グラウンドを共有している。幼稚園の教室から小学校がよく見え、グラウンドでサッカーをしている小学生もよく見えた。

<感想>

園内の壁の色や飾り付けなど、色がとても豊かに使っており、視覚的にも楽しい雰囲気を演出していた。居るだけで、わくわくするような感じだった。子どもたちもそれぞれ思い思いに過ごしていて、楽しそうだった。

子どもたちが撮ったという写真を見せていただいたが、プロかと思うほどの出来栄で、驚いたと同時にとても感動した。五感を刺激する活動がたくさんなされてるなあと感じた。訪問した際、階段の段ごとの真ん中に鉢植えが置かれているのを見つけた。これは右側通行するために置いてあるそうで、以前、日本の幼稚園で右側通行で階段をきちんと上がっている子どもたちを見て感激された園長先生が、取り入



れられたとお聞きした。お互いに学び、良いところは取り入れていく姿勢は大事であると再認識させてもらった。

お向かいの小学校も外観がとてもカラフルで、日本にはない色使いだったのが印象的だった。色のかもしだす楽しさがあり、日本にも取り入れたらどうだろうかと思ったりした。小学校、幼稚園とお互いに見渡せる位置にあるのも、いいなと思った。

(2) 江陵女子高等学校

<概要>

1940年に開校された歴史ある高等学校である。クラスは30クラスあり、生徒数1005名、教職員は92名の大規模校である。卒業生は24,437名(2012年)江原道有数の進学校であり、進路指導にも力をいれている。卒業生も各方面で活躍している。2007年には最優秀校として表彰されている。



特色としては、江陵で育ち、詩文・絵画にすぐれていた申師任堂(シンサイムダン)の精神を継承している。朝鮮時代の最高の儒学者として知られる李珣(リ・ジ)の母でもあり、良妻賢母の鑑とされる。



部活動も活発に行われている。寮も完備され、遠方からの生徒もここにいる。塾などの学校外教育への経済的負担を軽減するような工夫もされている。自習室もそのひとつである。

<感想>

いちばんはじめに、自習室を見せていただいた。びっしり並んだ机にまず、驚いた。実は、3年生にはひとりひとりに対して決まった自習する机があり放課後ここで10時ごろまで勉強をするということだった。家に帰ってやるよりもここで勉強した方が環境的にはいいのではないかと思った。

他の教室も見学させてもらった。ろうかに出て勉強している生徒がいたり、教室の後ろに背のかたい机に立って授業を受ける生徒がいたりするのが気になって聞くと、眠くなったりすると自主的に席から移動すると言うので、さらに驚いた。生徒の机には、水筒とケータイ・スマホが置かれていたのも、驚きだった。ケータイは、授業中使わなかったら、机に置いてあっても大丈夫だと聞いた。守れなかったら、1週間の没収だそう。日本では、勉強に必要なものは持ってこないというのが普通感覚だが、韓国では、ケータイなどあってもきちんとルールを守っていれば問題ないという感じをうけた。ケータイ・スマホに関しては、どのように対応していったらいいのかしっかり考えていかなければならないと思うが、この高校を見学するかぎり、ルールをつくり、きちんと守るようにすることでも対応できるような気がした。

7 まとめ（交流事業に参加して）

公峴津初等学校と鏡浦幼稚園を訪問させていただいて思ったのは、この時期の発達段階において、五感をフルに刺激することが重要だということであった。それが心と体のバランスのよい成長につながっていくことになるのだということを再認識した。いま流行りのゲームやインターネットなどの視覚だけを使うような活動・遊び方では、成長が偏ったものになる危険性があると思われる。

五感すべてを刺激するような体験や活動を子どもたちに提供できないかと思う。

ゲームなどよりももっとおもしろい体験！や活動！があれば、ゲームなどにはまることもないのではないか。親やPTAとして、それを自ら仕掛けていくことが必要ではないかと思った。

最後に、この交流事業の準備やお世話くださった韓日双方の関係者の皆さま、日本からの訪問を受けてくださった韓国の学校関係者の皆さま、ご同行の皆さま、有意義な交流となりました。改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

